

円地文子女の旅

円地文子紀行文集 第一卷

円地文子

女の旅

円地文子紀行文集 第一卷



平凡社

女の旅 円地文子紀行文集 第一巻

発行日

一九八四年五月十五日 初版第一刷

著者

円地文子

発行者

下中邦彦

発行所

株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五

郵便番号 一〇二

電話 東京(〇三)二六五—〇四五—

振替 東京八—二九六三九

印刷所

東洋印刷株式会社

製本所

株式会社石津製本所

© 円地文子 1984 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接読者サービス係までお送り
下さい(送料は小社負担)

定価 一六〇〇円

円地文子

女の旅

円地文子紀行文集 第一卷

目次

京へ

京都 技巧的な自然

8

洛西 京の旅

15

法然院

19

曼殊院の秋

22

寂光院のはりぼて像

24

京の味

26

京洛の春

28

女の風土 その一 京、大阪

京の紅枝垂

34

公家の女 京

41

上七軒界隈

55

ちりめん織 丹後

69

北の新天地 大阪

84

女の風土 その二 近江

小谷城趾とお市の方

100

琴糸をつくる女たち 湖北

安曇川の扇骨つくり 湖西

大和へ

125 111

奈良の仏たち

142

奈良の鹿

145

蛇 三輪神社で

149

女の風土 その三 大和、伊勢

吉野静

156

飛鳥の女帝

171

大和の尼寺

186

伊勢の斎宮

201

女の風土 その四 武蔵野ほか

むさし野の女

216

下田の女 唐人お吉

231

曾我物語の女 下曾我
柳橋の女 東京

263

247

装画・磯谷時子
写真・矢野建彦
(もくれん／あじさい)

まえがき

この紀行文集は旅行した先々で、そこにいる女の人たちとめぐりあってできた随想集である。

私は旅行が好きで、旅といえどこへ行っても損をしたような気がしたことはない。ことに、京都や奈良の近くは、一番、好みに合っているとみえて、行く度に新しい発見をして楽しむのが常であった。

ここにあつめた随想に近畿地方が多いのは、そのためである。郷土に住んでいる女の人たちもいろいろな仕事や暮しを持っているので、そこへ行つてその実際の姿を見、筆にしたものもある。

一九八四年春

円地文子

京へ

京都

技巧的な自然

私は京都周辺の景色……というよりも、それにもう少し、人間的な生活の加わった「たずまい」とでも呼びたいものに心をひかれて、よく出かけて行く。関西から向うに旅行することがあれば、帰りには大抵、京都に立寄って、一晩でも泊って、どこかに行ってみるのをたのしみに行っている。

よく案内に立ってくれる人が、ここへ行きましたか？ あそこは？ などときくのに答えていると、なんだ、それでは土地の人より知っているではありませんかなどと、笑われるけれども、実際には、まだ何分の一も京都を知らないのです、行く度に、こんなところもあったのかと驚きと愛を増すのがほんとうのところである。

今年も、五月のはじめと二十日ごろに二度、京都へ行ったが、はじめの折に京都在住の女友達に誘われて、賀茂川の上流に当る雲ヶ畑というところまで行った。

雲ヶ畑の名を、私は割に古くから知っていた。それは、京都では昔からの風習で、八瀬の方から黒木（粗朶）を頭に乘せて売りに来る女たちを大原女と言ひ、白川の方から花売りに来るのを白川女と言う。そうしてその他にもう一つ、畑の姥おばというのがあって、彼女たちは小梯子や、小さい台のような素朴な木工品を頭に乘せたり、背負ったりして、やっぱり京の町まで売りに来るのだということを何かで読んで知っていたからであつた。

雲ヶ畑へ行く道は、よく覚えていないが、賀茂川の上流がだんだん細くなった流れを右左に見ながら、少しずつ登りになった道を可成り奥へ入って行くのだった。道は先の方では細くなり、でこぼこして車が揺れたが、両側には、畑がひらけ、草崖には躑躅や、藤が咲いていて、緑を主色にして、飽くまで明るく開けた初夏らしい眺めであつた。

京都からは大分の道距みちのりで、三里（十二キロ）ぐらゐは優にあるであらう。これだけの道を歩いて、木工品の手細工を背負つて売りに行き、又、一日の内に帰つて来るのは、畑の姥の仕事もなまやさしいものではないと思つたが、どうやら、この職業は今でも、つづけられてゐるらしい話であつた。

（畑の姥の出くる土地は、あとで調べたところによると、西山の方の梅ヶ畑ということを知つた。しかし、そういう手細工をしたものを持って歩いている中年の行商のような女の人を、私は雲ヶ畑

へ行く途中でも見たので、その言葉と結びついて、実感を持ったのである。

いよいよ目的地に着いて、車を降りて見ると、そこは山裾の平地で右手に水垢離をとる滝があつて、正面のなだらかな石段を持つ山の中腹に、不動尊を安置した寺があるのだった。滝のある水口みなぐちのあたりの崖から上に高く真つすぐに生いのびている公孫樹や樺などの老樹が、五月晴れの雲一つない空に競うように鶺鴒色のわかかしい葉群れを軽々とそよがせている風情が何とも言えず、清々しく、下に立って見上げている心まで、洗われてゆくように思われる。雲は見えないけれども、全く、雲の近くに感じる感じがして、たのしかった。この不動尊は水垢離をとつて、病氣の平癒を祈ることを最初に始めたところだということを書いた。

実はここに出かけた一つの目的は、この山を更に裏の方へ登って行くと、石楠花の大群落のあるところに行けるということだったので、その道を半分ぐらいまで辿って行つてみたが、道が険しい上に、同行者の一人が行つてみたところ花はもう大方散つたあとだったというので、望みを失つて、引きかえした。

しかし、石楠花は見なくても、雲々畑の世にも美しい嫩葉わかばの色と、清々しい空を見たことで、私は一時自分の心身が透きとおつたような錯覚に陥り、そのことに十二分に満足し

た。

五月の二十日に再び行った時には、大原の三千院と寂光院をたずねた。

寂光院はこの頃めっきり周囲が俗化して、以前のものの寂びた趣きがなくなった。元々、建礼門院の隠棲地と言っても、ていの良い山流しにあっていような住居だったのだから、現在の程度に形のついたのも、豊臣秀頼の修理によってであろう。徳川氏が豊臣家の巨富を費い果させる為に社寺の建造や修理を頻りにさせるように仕向けた中のこれも一つであるが、寂光院の正面の額に「豊臣秀頼母儀」として、淀君の名を見出す時、私はこの修理の施主となった淀君自身もその後間もなく、建礼門院以上に悲惨な運命を辿って死に到ることを思つて暗然とするのである。

寂光院に較べると、三千院は建物には別に特徴はないが、いかにも門跡寺らしい石段の厚くがっしりしたかかりから、楓の多い境内の風情、殊に本堂の縁から往生極楽院のある奥庭まで、踏石の左右の楓に杉木立の見えるあたりが、何とも言えない。

五月の二十日ごろは、若葉がまだ軟かく、交りけない鶺鴒色に、小さい山もみじの葉を透かせて、あたり一面、みどりの薄絹のふわふわかぎりなくふくらむ中にいるようで私の連

れの若い女友達は、ここに三、四時間もこのまま坐っていたと言ったほどだった。

本堂の縁の下から板を敷き並べてある上を歩いて、往生極楽院の建物まで行く。ここは阿弥陀三尊を安置した船底天井の小さい御堂であるが、平安末と言われる本尊のお顔は、まことに美しく、私は平等院の鳳凰堂、日野の法界寺のとこれとの三体を兄弟仏と自分で勝手に呼んでいる。

三千院によく来るのも、半ばはこの仏にお眼にかかりたいためである。長い間堂が開かれずにいたというが、そのためか珍しく塗料の金色が剝落していないで、ほんとうに金色の仏と拝まれるのである。

木下利玄の『大原行』の中の一首に、

金色の本尊に奉れる桜の花

春しんとして輝く御堂

というのがあって、若い時から私の愛誦歌であるが、それは恐らくこの極楽院の御本尊に間違いないと思う。

三千院は、若葉の時と紅葉の 때가、四季の中で一番美しいが、今年の一月には、冬の半

ばに大原に行つて雪が庭を埋めているのを見た。その折の景色も捨てがたい趣きがあった。若葉で思い出したのは、五月に大原へ行った時、その翌日は琵琶湖の方へ出て石山へ詣でた。

その時、同行の友達とも話しあったことであつたが、同じ若葉時であるにかかわらず、石山あたりの若葉は、やっぱり何といつても湖水をわたつて来る風にいためられるのか、大原や西山あたりのそれと較べると、葉の肌も硬く、色も艶がなくて、何となく、あの薄絹の露の中にまきこまれるようなあやしい美しさとは縁遠かつた。海の汐風とは違ふ筈であるが、それでも、深山木の緑よりは風雪に耐えているわけであらうか。

京都の自然はそういう意味ですべてに人工の鍵がかかっているような気がする。山や川や木や石に対してそんなことをいうのはおかしいようだが、京都が一千年の間の都であつたことを考えあわすと、私の言葉は強い誇張や比喻ではないことにうなずかれる方も多いであらう。

王朝の物語や日記類を見ると、貴族が庭をつくるのに野山から、木や石、草や花は勿論、鈴虫や蛭などさえ大量にとつて来させたことが見えている。

単に野山ばかりでなく、氣に入った木や石があれば、人の住家からも召上げたことはあの有名な鶯宿梅の話によっても知られる。『大和物語』によると、村上天皇の時、清涼殿の前の紅梅が枯れたので、よい樹を求めて来るように仰せを受けて、藏人の某が京の内を探して歩くと、町外れの家の庭に、紅梅の見事に咲いているのがあった。

早速、掘取りにかからせっていると、女主人が歌を書いたのを、紅梅の枝に結びつけてさしあげた。帰ってからそれを帝にお眼にかけると、女文字で、

勅なればいともかしこし鶯の

宿はと問はばいかが答へむ

としるしてあったので、帝は女主人のやさしい志を賞美されて梅を元の家へ返されたというのである。この物語は、紀貫之の娘の歌才と、それを賞せられた村上天皇の徳をたたえた美談として伝えられているが、実際にはこのような事情で山野はもとより、民家からも貴顕の庭に移された樹や石は多かったに違いない。そうして、この關係を逆に見て行くと千年もの長い間、帝都であり、大寺院や由緒ある神社の多くをその内外に抱えて来た京都では、自然の環境以外に最も早く最も多く人間のたくみが植物にまで影響を与えていたと思われるのである。